作 者 ご 挨 拶

はじめまして、塩田ゆかりと申します。改めまして「この扉の向こうへ」ご来場本当にありがとうございます。この作品は昨年、秋の終わり頃に、私が佐藤さんにお会いしたとき、好き勝手話した妄想というか、遊びのようなお話を、「面白いから台本にしてみようか」となり、それから根気強く台本にしてもらった作品です。これは確かに「あたしの物語」です。ですが、やっぱり CHAN’T さんの作品です。何度か稽古場にもお邪魔させていただき、どんどんと役者さんが役と一体になり、また演出されていく中で厚みを増し、そうやって形作られていく作品を観て、改めてそう思いました。本番当日、劇場でこの作品を観られることを本当に楽しみにしています。皆さまにもお楽しみいただければ幸いです。

塩　田　ゆかり

主 宰 ご 挨 拶

ボクが演劇に触れたのは高校時代のことでした。１９９０年代のことで、当時のボクは何も知らないままに観た「第三舞台」の「ビーヒアナウ」にすっかりやられて、「つかこうへい事務所」の「熱海殺人事件」でより一層、脳をガツンとやられたような、羨望と焦燥、そして悔しさを感じるような、そんな高校生活を送っていました。

ボクが演劇にド嵌りする影響を受けた、この２つの作品、その創り手であったはそれぞれ、気がつけば第三舞台はその解散公演から１年が経ち、つかこうへいさんはお亡くなりになられてから、２年以上もの時間が経っていました。そう思うと本当に時が過ぎていくのはあっという間で、なんだかついこの間、な感じがしてなりません。そう、ついこの前紀伊国屋ホールで観たような気がするのです。

ラジオで耳にしたのですが、年齢を重ねるごとに、時間の経過が早く感じられるという研究結果が発表されたそうです。１０代の１日と３０代の１日は、時間を割る分母である年齢が大きくなることから、体感する時間経過も早くなるということだそうです。その話を耳にして、妙に納得しつつ、「あー、もう４０代が見えてきちゃったんだな」なんて思ってみたりするわけで。

で、そうやって歳を重ねてきて、でも、やっぱりあの時に観た、感じた、一体化できた、第三舞台のテンポ、スピード、加速感。つかこうへい事務所に感じた色気、躍動感、爆発力。それらは鮮明に脳裏へ焼き付けられていて、いや逆に時間が経ったことで、より自分の中で神格化されているような、そんな気すらさせられてしまうのです。

今回の作品作りは、塩田さんの原作を読みつつ、けど、あの時の何かを思い出しつつ、神様の仕事を思い出しつつ、そんな作り方をしました。演劇に関わって２０年ちょっと、出来上がった台本を読み返しながら、あの時の自分にちょっと戻ったような、そんな気持ちがしています。流行だとか、ダサいとか、そういうものではなくて、ただ自分の好きなモノを、神様への憧れを形にしました。

第２１回公演も「CHAN’T らしい」作品となりました。塩田さんの言葉と、ボクの愛した芝居を、素晴らしい仲間とできることに感謝。そして、本日はご来場誠にありがとうございます。狭い客席でご迷惑をお掛けし、誠に申し訳ありません。ぜひ、最後までごゆっくりお楽しみください。では、

劇団 CHAN’T 主宰　　佐　藤　　武